

## 令和6年度「教育研究グループ支援」研究結果報告

社会科教育実践研究会

### 【研究テーマ】

#### ダブルループ学習に基づく社会科教育に関する研究

### 【研究会の目的・方法・意義】

本研究会の目的は、社会科授業実践の報告・議論を通して、社会科授業実践を中心に教師の力量を向上させることである。

本研究会の方法は、会員の実践報告から会員・大学教員（実務家教員や研究者教員）・ゲスト講師（社会科教育を専門とする大学教員）とともに論点を定め議論をすることである。その際に「ダブルループ学習」を念頭に置き、議論を進める。

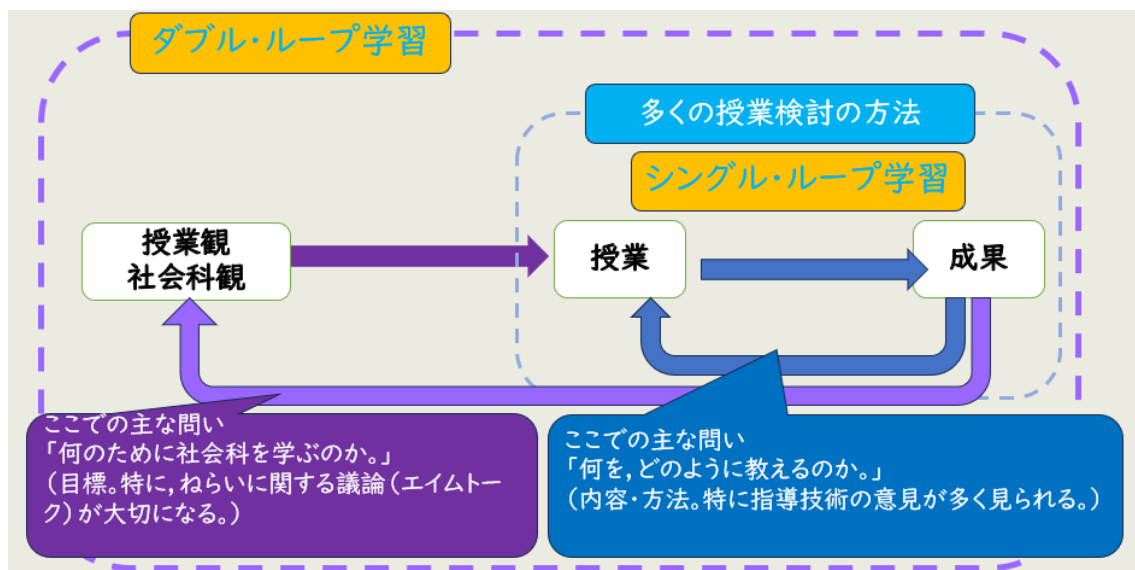
本研究会の意義は、「ダブルループ学習」を念頭に置くことで、「ねらいについての議論」、教科観の問い直し（何のために社会科を教えるのか）を行うことにより、授業づくりを変革させる可能性があり、今後の社会科教育実践について批判的に検討できることである。また、多様な大学教員が入ることで、経験的な支援、研究として理論的な支援があることにより、先行研究・先行実践を踏まえて実践の意味・意義が明らかになり、授業改善や次の実践へつながる視点を得ることができることである。

これまで東京都内においても、実践報告を中心とした勉強会や研究会は行われてきた。教師の力量形成という視点から、授業技術、多様な教材に出会えるなどに意義はあったと考えられる。しかし、助言や議論において経験則に基づくものが中心となりやすく、議論や省察の質を含めて批判的に検討することができていないという課題が指摘できると考える。本研究会では、この課題を克服するために構成員や議論の方法を工夫していくことにした。

### 【研究結果報告】

本年の研究は、「ダブルループ学習」に基づく授業検討の方法を考察することに重点を置いた。先行研究においては、「ダブルループ学習」の理論的枠組みは示されているものの、その内実は明らかとなっていないため、枠組みを意識しながら実践報告や議論から帰納的に考察する形で研究を進めた。研究会は学期末に1度ずつ（7月・12月・3月）行った。毎回、「ダブルループ学習」の必要性と重点を置くことを確認し（【資料1】）、実践報告・議論を進めた。

【資料１】 シングルループとダブルループの違い



これまで校内研修や研究授業等においては、「シングルループ学習」で授業改善に取り組まれてきた。授業内容や方法（特に指導技術）に関する助言や議論が中心であった。この検討方法はその授業に関しては改善される可能性があるが、抜本的に授業改善がなされることや次の単元の授業改善につながるとは限らない。教師は既に「観」を持っており（無意識の場合もある）、その「観」に基づいて授業作りを行うので、「観」を反省的に吟味しなければ抜本的な授業改善にはつながらない。そこで、「ダブルループ学習」を念頭に置くことで授業改善を中心とした教師の力量が向上すると考えた。

以上を受けて、発表者に目標論（何のために実践したものかなど）を説明した上で実践報告を行ってもらうことにした。「シングルループ学習」も一定の効果はあるため、議論の最初に事実確認も含めて検討を行った。その上で議論の論点（共通するもの。各発表に対してそれぞれ設定した論点もある）を次のように設定した。

< 論点の例 >

- ①発表された授業の良さ（意義）は何か。
- ②授業の目標は、社会科の目標にどのように位置付くか。
- ③同じ単元でどのような授業ができそうか（ほかの授業の可能性を探る）。

これらを踏まえて個々人の発表に対して論点を定めながら議論を行った。以下では研究会の発表概要と議論した点について概略を述べる。

## 第1回研究会

### ① 初任者教諭による研究授業の発表

論点として、授業者の目標に応じて、どのように授業改善できるかを議論し、その後で、他の授業の可能性を考えるために「同じ範囲の授業を参加者の先生方はどのように実践しているか。」を設定した。ここから議論を進め、世界の古代文明を教える必要性やそれは社会科の目標とどのように関わるのかを議論した。

この議論により、発表者は次の授業づくりに向けて目標論や社会科の授業理論の類型化を意識するようになり、自分の授業を対象化してみようとする姿勢が見られた。参加者も自己の授業観との比較を行うことができた。

### ② 主任教諭（中堅者）による実践報告

現代社会の問題を解決していくために必要な資質・能力の育成として、歴史上の意思決定場面を行動経済学の視点から考察する授業を提案した。特に、意思決定に影響を与える認知バイアスに着目しながら提案された。

同じ単元で授業を作って実践したものを検討する方法を取り上げた。校種の異なる高大連携公開シンポジウムでの発表が同じ範囲であったため活用することにした。中高接続を踏まえた議論にもつながった。

### ③ 若手教員による授業づくりの相談

地域学習について実践してみたいことはどのようにすれば実現できるのか、について議論した。実践前の手続きや実践中の配慮、実践後の振り返りや管理職や地域への提案方法を検討した。提案者の目標論を明らかにした上で、どのように実現させるかは経験と理論の双方が必要であり、大学の実務家教員（元校長）からの現実に合わせて留意点のアドバイスや経験知からのアドバイスは研究会の学びとなった。

第1回研究会では、「ダブルループ学習」を行うために、同じ単元ならどのような授業ができるのか（他の授業の可能性を探る）を議論した。目標論（何のために教えるのか）から省察する方法を試みた。その結果、初任者教員にとっては被教育経験から授業作りを行っていたが、多様な方法を知ることによって自分の授業の位置付けや改善点を検討することにつながっていた。

## 第2回研究会

第2回では参加者からの質問を重視しながら運営した。

### ① 教職大学院生による発表 日本の中地域「関東地方」

愛媛県での教職大学院実習（東京都の教員になる院生）における関東地方の単元の発表であった。地価の変化やその理由を探る授業提案であった。大学教員からは「なぜ地価が上がっているのか」の問いだけでなく「なぜ地価が下がっている地域があるのか」を入れることで社会認識が深まるという提案をいただいた。

## ② 若手教員による発表 世界の諸地域「アジア州」

キーワードとして、日本とのつながり、地球的課題、食、格差、貧困、環境問題、開発が挙げられ、問いとしてなぜバングラデシュが世界2位の衣料品輸出国となったのか、なぜ日本でたくさんエビを食べられるのだろうか、など生徒にとって身近な教材を扱った。議論では、発表者が単元内に位置付けることに困難を感じた授業をどうすれば位置付いていくのかについても意見があり、関連して他の教材、「バナナ」や「カレー」なども扱えることが共有された。ねらいに基づいて教材を活用することで単元の一貫性を持たせる方法を検討できた。

## ③若手教員による発表 学習課題を追究する過程で「生徒の立てた問い」を用いる指導の工夫

歴史的分野における単元について、生徒が問いを立て探究していく授業の報告である。課題として、問いを立てることができない生徒への支援、問いの精選や構造化が出来ていないことが挙げられた。教員のねらいに即したアドバイスとともに、大学教員からはそもそも生徒が探究するための問いを構造化する必要性があるのか、という意見が投げかけられ、目標論を反省的に吟味する契機を与えていただいた。

第2回研究会では、教職大学院生、若手教員の発表があり、実践者のみでは気付きにくい課題が指摘され、改善案を検討できた点が成果であった。しかしながら、論点設定を積極的に行わなかったことで、授業者の目標に合わせてどのように改善するか（シングルグループ）に終始してしまった点が課題として挙げられる。

## 第3回研究会

第2回研究会の課題を踏まえて、積極的に論点を示すとともに参加者の発言を拡げる意識で運営した。論点設定があることにより、ダブルグループが促進されるとともに、次の実践への展望（仮説）を協議できた。

### ①高等学校若手教員による地理総合の報告「ファストファッションの功罪」

地球的課題を初めて扱う単元の提案である。生徒にとって「緩やかな関わり」を感じる事例としてファストファッションを取り上げた。どのようにして手元に届くのか、ファストファッション業界での悲劇はなぜ起きてしまったのか、問題を解決するために必要なことは何か、議論していく学習が提案された。課題として、ジレンマを引き出した一歩先へどのように進めばよいのかが挙げられた。どのようにカリキュラム編成を行っていくのか、目標論を吟味しながら議論したことにより、次単元以降の授業内容を考察することができた。

### ②教職大学院課題研究の発表

歴史の授業に地理的な見方・考え方を取り入れた実践報告であった。3Dプリンターを活用し、地形を立体的に触りながら体感させて考えさせていく授業で

ある。研究の成果として、地歴連携の意義、3D 地形教材の有効性等が示され、課題として考察の範囲が狭くなることや繰り返し学習する必要性が示された。目標論の違いから地理や歴史としての学習について議論した。

③教職大学院（現職教員）課題研究の発表「歴史と私たちとのつながりーウクライナ戦争を考えるー」

歴史的事象とのつながりから現実社会の諸課題を考察・議論する学習としてどのような授業を実践することができるのかを提案し、仮説として「歴史的類推」を用いることが有効であると示された。成果として、「歴史的類推」を用いて時事的な問題を考える授業を実践したことにより多くの生徒は「過去の教訓を生かす」ことなどに歴史を学ぶ意義を見出した。課題として「歴史的類推」の妥当性や議論学習の継続的な取り組みが挙げられ議論した。

④ 中堅教員による都中社の研究発表を踏まえた歴史学習の主体について

令和6年度東京都中学校社会科研究会合同研究発表会における歴史的分野の発表で挙げられた成果と課題について応答する形で提案された。特に、歴史学習と能力を獲得する主体である生徒の関係を大きく2つ（歴史の外と中）で捉えた。すなわち、歴史の外から解釈をするのか、登場人物の立場から歴史を解釈するのかの違いにより、学習内容や生徒の認識は変わることを主張していた。知識・スキル等の転移についての議論となった。

<講師の先生（大学の研究者教員）からの講評>

すべての研究会において、大学の研究者教員に議論に参加していただき、最後に講評をいただいた。本研究会は、経験則のみに基づく教師の力量形成ではなく、経験と合わせて理論的に検討することこそが力量形成につながるという仮説に基づいているため、実践の意義や研究上の位置づけ等を示していただいた。

3名（1回につき1名）の先生からは、多様な指摘をいただいた。例えば、社会科教育における授業類型に基づいて発表授業を位置付け、実践の意義や成果と課題を整理していただいた。また、問いの立て方を変えることにより、目標論に応じたより良い授業の提案もしていただいた回もあった。また、論争問題学習と意思決定学習の違いや歴史授業における授業理論を示され、各理論の目標論や特徴、事例を紹介していただいた。3名の先生から本研究会の意義についても言及していただくことができた。例えば、教員養成に関わる大学教員としても大学の教員養成と入職後の学習の機会をいかに接続するかが課題であり、教師の協働的な学びの場となっていることに意義があること、教職大学院生や若手教員、中堅教員が発表しており、多様な授業が検討できることに意義があることなどをお示しいただいた。

「ダブル・ループ学習」を念頭においた論点について議論するとともに、専門家（大学教員とゲスト講師）が入ることで充実した議論となった。